

## 「熊野信仰の発展と東北」

笠原 弘邦 (※)

### (1) 熊野信仰の成り立ちを考える

大和国からはるか南方 紀伊山地を越えた紀伊国熊野の地にどのようにして熊野信仰がおこったのであろうか。時代が下だつて平安の都から 熊野詣に 1 ヶ月近くもかかる遠い場所である。

2004 年 7 月に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録された年の 8 月、私は、新宮市から田辺市の滝尻王子社までの“熊野古道・中辺路”約 100km を歩いて来ましたが、熊野の重畳と連なる山脈の奥深さ、うっ蒼たる森と林、湧き出る多くの温泉、そして滝や川、海や巨石などの自然物を目の当たりにすると、熊野はただ単に風光明媚な地という感慨を越えて、そこは神聖で神秘的な国、神の座す国、常世の国に近いところという思いがこみ上げてくるのでありました。

熊野信仰のおこりを考える時、神道の誕生を共に考慮しないわけにはいかないと思います。

古代人は木の実や果物、野草、狩猟でとった獲物など、いわゆる自然の恵みを“神からの授かりもの”と考えていました。そして、農耕がはじまったのちにも、米や麦の収穫は、人間の労働の成果ではなく、“神の恵み”によってもたらされたものだと考えていました。「田畑を耕し、水をひき、種子をまくのは農民である。しかし、まいた種子を育てるのは自然の力である。」この考えから、我が国では春に豊作を祈る神事(春祭り)、秋に収穫に感謝する祭祀(秋祭り)を行い、自然を大切にする生き方を身につけていました。

神道は、縄文人の精霊崇拜、弥生人の祖霊信仰を基にして生まれたと考えられています。即ち精霊崇拜は人間も動物も植物も精霊をもち、さらに風・雨などの自然現象を起こす精霊もある。そして数多くの精霊は平等な存在とされていたのです。貝塚には、動物の骨、貝殻、植物の種子、壊れた道具などと共に、死者の人骨が出土します。これは、縄文人が貝塚はごみ捨て場ではなく、“役割を終えた精霊をまつ場所”だと考えていたことを示しています。又自然界を構成する「地・水・火・風」の四大精霊をとくに敬う気持ちを持つようになり、この四つの精霊の力が合わさって初めて「土器」ができるのだと考えていました。

祖霊信仰は、亡くなった人間を神としてまつことですが、この祖先を敬まい大切にすることはごく自然な気持ちです。これは現在の我々も抱く感慨です。

古代の人々は、熊野の地は“亡くなった先祖の霊がこもるところ”と考えていたようです。時代が下つて大和朝廷の人々は、かれらの本拠の南方に広がる吉野から熊野にかけての山岳地帯を神聖な他界と考えていました。特に熊野の海岸は、あの世(常世国)につらなる地とされていました。

このようにはるか遠い古代から連綿と続く想いが、この熊野の地が“熊野の神が座すところ”という熊野信仰のおこりの基となったのだらうと思うわけです。

---

(※) 講師プロフィールは最終頁参照

## 「クマ」とは何を意味しているのか

ここで、「クマノ」の地名について、いく人かの学者の説を簡単に記します。

- 折口信夫説 「クマ」は田の神に捧げるために、畔に積んだ供物のこと。
- 近藤善博説 「クマ」は奠(テン)の意味であり、「クマノ」は奠の場の意味である。(奠:そなえる、さだめる、香奠、奠都)
- 松村武雄説 「クマ」は精米(くましね)より来ており、神に捧げる供米(くまい)より来た語である。
- 鎌田純一説 「クマ」は神の意(例:九州方面で、「神代」をクマシロと読む)  
「クマノ」は神の住みたまう地との意の信仰をもとにしている地名。  
牟婁郡の「ムロ」も神のこもられているところの意。

このように、古い時代より「クマノ」の地は、“神聖な地、神の住みたまう地”と見られていたようです。

## 神話にみる熊野

### ①『日本書紀』神代紀(上)

伊邪那美神イザナミノカミが火の神カグツチを産み落とすが、燃え盛るその子によって命を落とす。

その亡骸は、紀伊国熊野の有馬村に葬られた。

(この地熊野が常世国、黄泉国とよのくにに近いところとみられたことを意味している)

※常世国:海上はるか遠方にある理想の地、先祖のおられるところ

### ②『古事記』神武東征の段及び『日本書紀』磐余彦の東征の段

兄と共に天下平定を思い立ち、高千穂を出発し東方遠征に出た神日本磐余彦(かむやまといわれびこ)は、数々の敵を倒しながら、熊野の神邑(新宮市の由来か?)に上陸した。が、熊野で怪しい熊の妖気に当たり、気を失って倒れてしまう。しかし、天照大神から下された剣を得て覚醒、その後も荒ぶる神々を次々と成敗しながら、遣わされた八咫鳥(やたがらす)に先導され宇陀に着く。そして橿原宮にて即位する。初代天皇神武の誕生である。

## (2)熊野の地における信仰の展開は

538年 仏教伝来(552年説もある)

587年 蘇我氏や聖徳太子が物部尾輿の子・物部守屋を滅ぼす。(排仏論者)

→朝廷により大がかりな仏教興隆策がとられる。

(7世紀初頭) 法隆寺等の大寺院がつくられるが、当時の人々の大部分は、仏教学を学ばずに仏に現世利益(げんぜりやく)を求めた。

寺院をまねて神社がつくられ、やがて仏像・仏画のかたちをまねた、神像や神の肖像画がつくられるようになった。

(634~701年) 役小角(えんのおづぬ・役行者)が、初め葛城山に住み、呪術を以て称せされ、のち吉野の金峰山にて密教の修験に臨み道場を開く。(大峰奥駈道、大峯七十五摩(なびき))

(764~770年頃) 称徳天皇の御代に、永興禪師(奈良興福寺の僧)が仏教政治で乱れていた奈良を避け、紀伊国牟婁郡熊野村に来て修行をしていた。海辺の人々が教えを受け、その行を貴びてほめたたえ、南菩薩と称した。(『日本霊異記』)

- 816 年 弘法大師空海(774~835)が高野山に金剛峰寺を開き、真言密教の高揚につとめる。
- (900 年代) 吉野の金峰・大峰山より熊野に通じる行場が開かれる。これにより、新宮から本宮に至る山中の行場と合わせて、二つの行場を結ぶ仏教と修験道の一大行場ができたわけである。これにより“熊野”が改めて世に知られるようになった。
- その頃、すでに熊野本宮大社は名神大社として、熊野速玉神社は大社として、朝廷の篤い崇敬をうけており、中央にその神威が輝き、伝わっていた。
- 907 年 宇多法皇が上皇としてはじめて熊野本宮・新宮へ御幸される。これは大きな意義があることである。
- その際、本宮大社に正二位を授けている。
- その後、三善清行(847~918)の子・浄蔵が那智に入り修行、ここにはじめて那智が行場として開かれた。(飛瀧神社 ひろうじんじゃ)

朝廷の支配層の意向によって、神道がしだいに仏教や儒教の知識を取り入れながら、一定の形式にまとめられていった。この営みは、ひとまず“神仏習合”の形をとって完成した。

この神仏習合を進めたのが、天台宗と真言宗の密教勢力で「密教を身につけた高僧は、仏と同等の強い呪力を持ち、あらゆるものを思いのままに操れる」とした。

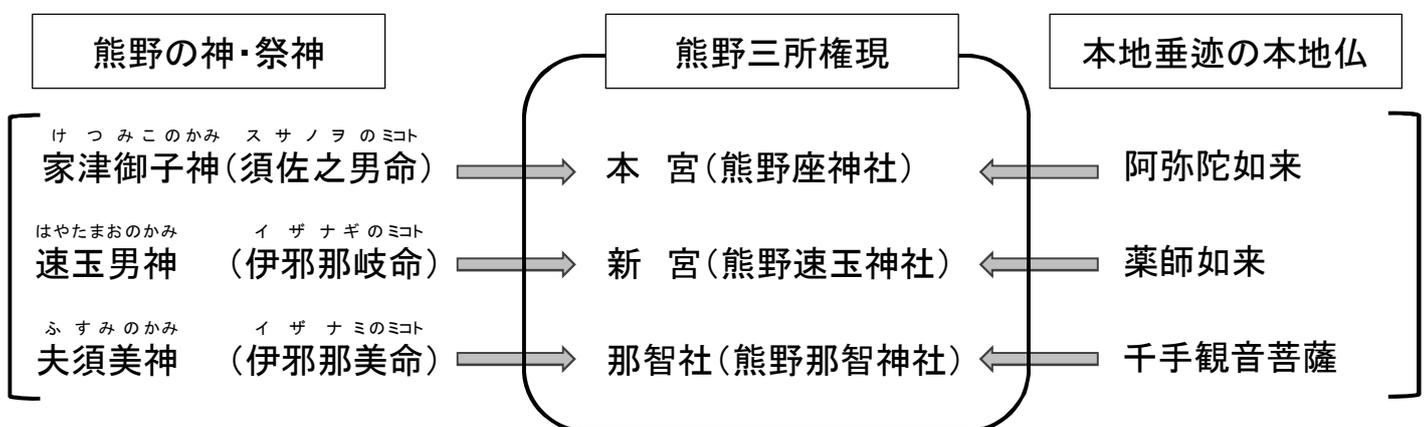
→当時の貴族は、密教僧に雨乞いや政敵の排除など、様々なことを祈らせた。

→比叡山や高野山などの密教寺院が、密教修行の場として繁栄する。

この密教による神仏習合に対する主張は、「仏は幾度も生まれ変わって人々を助けるものであるから、日本の神は、仏の生まれかわった姿の一つである」との思想からである。これを「本地垂迹説」と言っているが、要約すると次のようになるであろう。

〔 本地である仏・菩薩が衆生を救済するために、我が国の神祇となってあらわれる。 〕  
 とする神仏同体説である。

この思想が熊野信仰にも具現化された。



## 本地仏の御利益は

- 阿弥陀如来 …… 「南無阿弥陀仏」と唱えて、功德を積みば臨終のときに、西方浄土から迎えに来て、極楽に往生させてくれる。
- 薬師如来 …… 病の苦しみを救う(病氣平癒)。寿命を延ばす(延命長寿)。貧困を除く(社会不安からの救済)
- 観音菩薩 …… 「一切衆生救済」世の人々の苦しみやあらゆる願いに一切すみやかに応じてくれる。

(912～985 年) 天台座主慈恵大師良源上人<sup>りょうげん</sup>が布教のため東北地方を歩き、各地の寺に熊野神を勧請する。

(990～995 年頃) 花山法皇が那智へ御幸<sup>ごこう</sup>され、庵を結んで行をされる。

1052 年 末法思想 釈迦の死後、正法・像法の世をへて末法の世がくるという説で、当時 1052 年に末法の世に入り、仏教が廃れ、世の中が荒廃し暗黒の時代が到来すると信じられていた。

→この世で幸福が望めないなら、せめてあの世では極楽へ。そのような祈りを込めて平安貴族たちは争うように阿弥陀仏像を造立した。

→このような時代背景から上皇たちの熊野詣や高野詣がピークに達した。

(1081～1087 年) この頃、「熊野三山」という呼称が一般的になって唱えられる。

### <三上皇の院政期と御幸回数>

(1086～1192 年) 白河上皇 (院政 1086～1129) ……御幸 9 回  
鳥羽上皇 ( // 1129～1156) ……御幸白河上皇と 3 回 + 18 回 = 21 回  
後白河上皇 ( // 1158～1179, 1181～1192) ……御幸 33 回

※院政期の様子は、右大臣中御門宗忠の日記『中右記』<sup>ちゅうゆうき</sup>に詳しい。

## (3) 修験道と熊野神社

平安時代末期(12 世紀)に、熊野・吉野などにおいて山岳修行がさかんになる。

→そこから熊野三社を中心に、“修験道”という仏教と神道、それにさまざまな民間信仰を融合させた新たな信仰がつけられた。

→この修験道を身につけた修験者は、さまざまな呪術を用いるとされた。そのために、皇室も貴族も彼らの呪力に頼ろうとして、しきりに熊野詣を行うようになった。

→そして、修験者たちは、皇室との結びつきを強めつつ、全国各地の農村への布教に力を入れた。

修験者のことを“山伏”ともいうが、平安時代末から、全国をめぐり歩く山伏の姿が広く見られるようになった。

山伏は、農村で、病気なおしの呪術や屋敷神の祭りを行った。

→農民にとって、定期的にくまってくる山伏は、外部の情報をもたらす語り手でもあり、悩み事の相談相手であり、医術や読み書きを教えてくれる師匠でもあった。

- 中世の農村では、伝統的な神社の祭りも行われていたが、山伏はそれとは別の役割を持つ、農民の生活に欠かせないものになっていった。
- 中世に、全国に山伏の手で開かれた熊野神社も多い。

朝廷と各地の熊野神社との間に、親密な関係が保たれたため、熊野三社の修験者たちは、朝廷の意向を受けて、各地の熊野神社を巡り、皇室と天皇寄りの地方武士との連絡にも活躍するようになっていった。

#### 【<sup>しゅげんじや</sup>修験者の主な役割】

- 神社の別当
- 祈祷・薬草による医療行為
- 参詣案内、講組織の指導(御師)
- 子弟の教育(寺子屋)
- 祭りや年中行事の指導・助言
- 講社まわり、檀家への御札配り

#### (4)熊野比丘尼たちによる布教活動

平安時代も末期に近づいてくると、全国各地から、貴族や武士ばかりではなく、農民や商人などの一般庶民の熊野詣がますます増大していった。人々を引きつけた大きな理由は次の三つが考えられる。

- ①熊野の神は、浄・不浄をとわず、又貴賤をとわずだれでも広く受け入れた。
- ②当時、女人禁制の信仰の山がほとんどであったが、熊野三山は女性を受け入れた。
- ③阿弥陀・薬師・観音の強力な利益<sup>りやく</sup>を保証してくれる三仏の大きな御加護。

それとは別に熊野比丘尼や熊野念仏聖らの活躍によることも大きな要素である。

熊野比丘尼は、新宮の御神体である神倉山の麓にある妙心寺を本拠地として活動し、その方法として「熊野那智参詣曼荼羅」や「熊野観心十界絵図」などを用いての”絵解き”と称する説教で、絵図を見せながら解説し、熊野三山への勧進・布教や熊野への参詣を勧誘したのである。





また「牛王神靈札(俗に牛王宝印という)」の配布も行った。これは起請文にも用いられた。



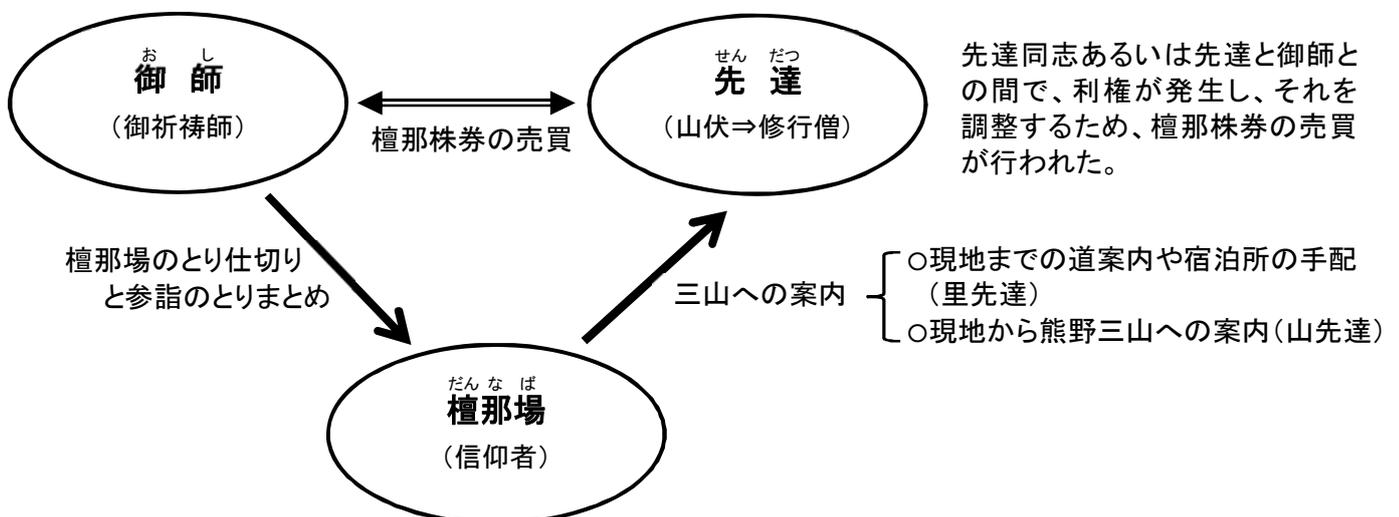
写真: <<http://www.jalan.net/yad398080/blog/entry0001378512.html>>

近世に入ると、江戸幕府は修験者が信仰を通じて各地の武士を組織するのを嫌い、山伏に定住をすすめるようになった。そのため都市や農村に定住して“里修験”とよばれる者が多くなった。

その頃になると、国内の交通がさかんになったため、山伏がもたらす情報が前ほど貴重ではなくなった。

→熊野三社の地方に対する影響力はしだいに後退していった。

### 〔師檀関係〕



このような三者の関係が組織化され、熊野信仰が全国各地に浸透するのに大きく寄与した。

## (5)出羽三山信仰

出羽三山信仰のおこりを考える時も又、熊野信仰の時と同様にここ東北の地に住んでいた先祖の人たちが自然に対して抱いていた畏敬の念のことを考えずにはおられない。

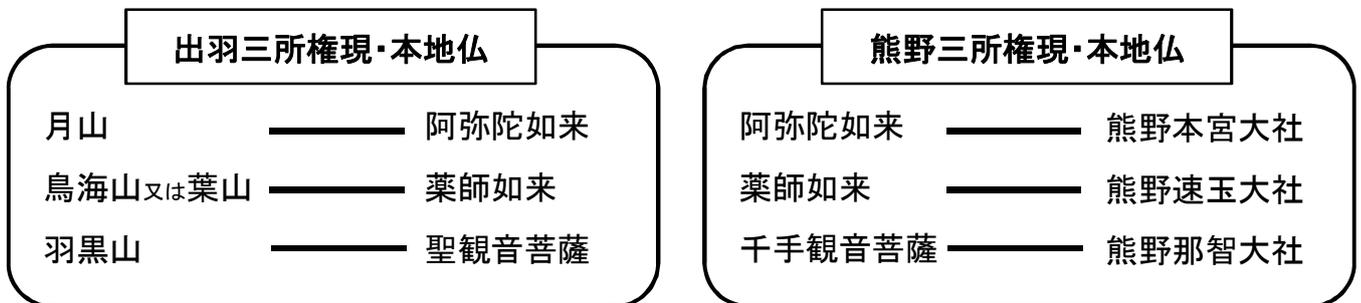
ただ、熊野と東北の自然環境に若干の違いがあると思うのは、紀伊国は極端な言い方をすると、実感として、こんもりと森と山々に埋もれており、その谷あいの狭い平地と海岸に面したやや広い平地に人々が住み生活をしていることに対して、東北は奥羽山脈という長大で大きな、東北地方中央を貫ぬく脊梁山脈があるにはあるが、人間が居住している、かなりの広さを持つ平野が数多くある点である。

そこで、古代の東北人は、里から遠くに見える秀麗な高山に対して、そこは神の住みたもう霊峰として崇めたに違いないと思うからです。

確かに冬には真白に雪でおおわれた高山は美しく気高く感じる。身近な人が亡くなると、その死者の魂は、まず里に近い山に昇り、次に遠くの霊峰に昇って行くと考えていた。いわゆる羽山信仰であるが、この山岳崇拜は東北に実に多い。各地にある羽山、葉山、端山がそれである。

そして、信仰の対象になっている高山は、岩木山、岩手山、早池峰山、蔵王山などなど数多い。出羽地方においては、羽黒山であり、鳥海山であり、月山であった。また東方の村山平野から見た場合は、一番手前の葉山であり、月山であり、羽黒山だった。これが出羽三山信仰の始まりであると思います。

次に平安時代中期に密教により押しすすめられた本地垂迹説により、東北地方にもかなり浸透していた熊野信仰の影響を強く受けて、出羽三山にも本地仏が置かれるようになったのだと思います。それを熊野信仰の本地仏と並べて図示すると次のようになります。



これを見て分かる通り、出羽三山の本地仏は、熊野三山の本地仏とそっくりなのです。

これはどうしてかと言うと、現世と来世の二世にわたり絶大な利益がある三仏の組み合わせが、東北地方の人々に熱く支持されたからなのだと思います。もち論、熊野信仰にあやかりたいという思いもあったことでしょう。もともと無関係な遠く離れた熊野と東北の土地同志が、同じ本地仏を求めたのは、人間の普遍的な価値観だということだと思います。

ここで、一つだけ若干異なっているのが、千手観音が聖観音に変わっていることですが、これは天台宗開祖の伝教大師最澄(766~822)の高弟で、第三代天台座主になった円仁(794~864)の影響によるものだと考えられています。円仁は出羽国を広く布教し、円仁の開基あるいは中興になる寺社が数多くあります。そして東北の人々に厚い尊崇を受けており、その法統が広く、深く浸透しておりました。それで円仁ゆかりの延暦寺横川根本中堂の本尊仏である聖観音菩薩を積極的に取り入れたのであろうと考えられています。



聖観音菩薩立像(横川根本中堂)

- ★現在、出羽三山は月山、羽黒山、湯殿山であるが、湯殿山は、かつて「出羽三山総奥院」とされ、鳥海山や月山の東方にある葉山が三山に含まれていた。
- ★天正年間、葉山が、別当寺であった慈恩寺との関係を絶ったことで葉山信仰が衰退し、これ以降湯殿山が出羽三山の1つとして数えられるようになったと言われている。



羽黒山・出羽神社(三神合祭殿)



庄内地方からの月山



月山神社本宮と鳥海山

写真(左上) <[http://kannonsama4000.blogspot.jp/2010\\_10\\_01\\_archive.html](http://kannonsama4000.blogspot.jp/2010_10_01_archive.html)>

写真(左上) <<http://www.dewasanzan.jp/publics/index/19/>>

写真(中) <<http://tsuruokakanko.com/cate/p0074.html>>

写真(下) <<http://gassan.jp/>>

## (6)東北6県における主な熊野神社

### ① 山形県南陽市宮内 熊野大社

大同元年(806)の創建。もともとは仏寺であったが、貞観6年(864)比叡山座主慈覚大師円仁が、東北巡礼のおり、当寺に参詣し、堂宇の大破を嘆き、勅命を受けて復興する。大師自ら、阿弥陀・薬師・観音の三仏と大黒天を刻んだと伝わる。

### ② 寒河江市平塩 熊野神社

養老5年(721)紀州熊野三社より勧請。行基の開基。

江戸時代149石9斗の朱印地(免・祖役)。3殿16坊の隆盛を極めた。平安時代後期の作と推定される木造十王像や鎌倉期の木造吉祥天立像などがあり、由緒は古い。

隣地に別当寺平塩寺(真言宗)があり、神仏習合の特徴が見られる。

### ③ 山形市六日町 熊野神社

初代山形城主斯波兼頼が延文3年(1358)行蔵院道覚をして、紀州熊野大権現を勧請し、城内に祀ったのを草創としている。

元和7年(1621)、現在地に移して山形城鬼門の鎮護とした。

### ④ <sup>あくみ</sup>飽海郡遊佐町杉沢 熊野神社

鳥海山登山道杉沢口の1合目にあたる西麓の地にあり、承和元年(834)出雲国から分霊を勧請したと伝わる。山伏によって伝承されてきた番楽の修験の舞は、杉沢比山として有名。

### ⑤ 秋田県湯沢市横堀(旧雄勝町) 熊野神社

### ⑥ 湯沢市小野(旧雄勝町) 熊野神社

### ⑦ 青森県弘前市田町 <sup>おくてる</sup>熊野奥照神社

白雉4年(658)阿倍比羅夫が出羽国の蝦夷を討つ。副使物部安麻呂が津軽に来て、熊野三所権現を祀る。

延暦7年(788)比羅夫の子孫、比羅賀洲王が奥尾崎(小泊村付近)より扇野庄(弘前)に遷したのが鎮座の初め。

### ⑧ 福島県喜多方市慶徳町新宮 熊野神社

後三年合戦(1083~1087)の際、源義家が勧請したと伝わる。

国の重要文化財の熊野神社長床(拝殿)や1341年銘の銅鉢など多くの文化財がある。

### ⑨ 南会津郡南会津町(旧田島町) 宮本熊野神社

### ⑩ いわき市錦町御宝殿 熊野神社

### ⑪ 宮城県名取市高館 名取熊野三社

**熊野新宮社**……拝殿の北に奥の院とよばれる本殿3棟がある。証誠殿を中心に、十二社権現社と那智飛龍権現社。旧別当寺である新宮寺には、平安時代末期頃の造像とみられる獅子騎乗文殊菩薩座像が文殊堂本尊として祀られている。

**熊野那智神社**……明治31年社殿建て替えの際、地中から数多くの御正躰と銅鏡が発見され、その内155点が国・県の重要美術工芸品に指定されている。

**熊野本宮社**……以前は小館といわれる山の上(大館城跡)にあったが、万治元年(1658)に現在地に遷された。

⑫ **名取市高館川上字北台 今熊野神社**

慶長5年(1600)前田村小清水屋敷の守屋氏が伊達政宗に水田四十数町歩を寄進。恩賞に、信仰している観音を赤坂山に祀ってほしい旨望んだところ、赤坂大明神に合祀され、今熊野神社と改称した。

⑬ **大崎市古川字宮沢 熊野神社**

文治元年(1183)藤原秀衡の勧請。御神体は平安末期作と推定される御正躰で、直径45.5cmの円盤で、銅造の阿弥陀如来像を鏡面に留めて一体化している。

⑭ **岩手県花巻市上根子字熊野 熊野神社**

大同元年(806)の建立。坂上田村麻呂が東征の折、胆沢城と志波城を築いたが、その中継地として設けた盤城駅がこの地で、熊野大権現を勧請した。

境内に熊堂古墳群7基が確認される。墳丘は直径約10m、高さ1m程の饅頭型で、周溝があり、石室は多数の中小の川原石で築かれている。副葬品として、勾玉・管玉類や水晶の切子玉類、和同開珎、蕨手刀などが出土している。

**【講師 笠原 弘邦 の自己紹介】**

1944年8月4日生れ。北海道旭川市出身。

弘前大学理学部生物学科に在学し、動物発生学を専攻し卒業。

1970年4月に来仙後、卸商社に勤務のかたわら、学生時代より親しんできた山岳登山にいそしみ、仙台無名山塾に入塾、深野稔生氏より沢登りの技術を習う。その後、仙台山想会に入会して、東北の山々の沢に入る。又冬は、シールをつけての山スキーを多くの山で楽しんできた。

その後、50代中ば頃から郷土史に興味を抱き、仙台山想会の創立者であり、旅行作家として多数の紀行文を発表・出版している岡田喜秋氏と共に今日まで十数年、東北地方の史跡探訪の旅をしてきた。

日本史での関心は、東北地方の古代史で、特に律令国家による蝦夷対策や古代人が信仰していた寺社やエミシの足跡を訪ねることなどである。

2004年8月、還暦登山として“熊野古道・中辺路”を新宮市の熊野速玉大社から田辺市の滝尻王子社に至る全コース約100kmを徒歩と野宿で踏破し、続けて九度山町の慈尊院から始まる”高野山町石道“を歩き、高野山を訪ねる旅をしてきた。

現在、宮城県歴史研究会の事務局長を勤めた後、仙台郷土研究会(1930年創立で、広く東北地域の埋もれている歴史などを調査・研究し、機関誌を発表している団体)及び日本環太平洋学会(本部奈良市。日本及び東南アジアの古代史を中心に研究し、機関誌「環太平洋文化」を発行している団体)に所属している。

